

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第八十一卷「芸術、文化、言語、文学（二の一）」

言語学、言語と人類、言語の起源、語族、語派

編纂、監修 岩崎純一学術研究所 『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第八十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、言語学、とりわけ、言語と人類、言語の起源、語族、語派に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

「言語とは何か」についての私の考え方（ソシユールなどの著名な言語学者との比較を中心に）

現代日本語に関する実験

言語はなぜ家族を捨てるのか

新常用漢字

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

「言語とは何か」についての私の考え方（ソシユールなどの著名な言語学者との比較を中心に）

二〇〇五年九月五日 起筆

二〇一四年九月十八日 公開

二〇一七年三月十三日 最終更新

このページでは、私自身の言語についての基本的な考え方とその学術的な根拠を大まかに書いてみます。

岩崎式言語体系に初めて触れる方向けのページでもあり、まずは言語学・言語哲学などの学問そのものの面白さを知っていただくことも兼ねて、一般によく知られたフェルディナン・ド・ソシユールなどの言語学者の学説との比較という形で書いておきたいと思えます。

例文には、実際に私が聴取・目撃した言語障害者や精神疾患の方々の日本語文を多く含んでおり、これらは私が新たな言語体系を考案する上での大きなヒントとなっています。

言葉は、人間とは別にあらかじめ存在する何かを言い当てるもの（記号）ではない。

【例】

● 「コップ」……

もし「コップ」が「液体を漏らさずにそこにとどめることができるもの」を指す名詞ならば、飲料の入れ物だけでなく、プール、地球（海水が引力で引き止められている）、感涙・発汗・出血していない人体なども「コップ」となる。一方で、涙を流している人、運動している人、ケガ人ばかりか、倒れたコップ、割れたコップなども「コップ」ではなくなる。

← 個物や身体の向き・形状・状態が変わっただけで同一性が理解できなくなる疾患……統合失調症・妄想性障害・せん妄・解離性障害などの精神疾患の一部や脳卒中患者の一部

● 「とべりたちるひ」……

統合失調症者の造語。「数百年後にこの世に現れる親友と自分との本当の友情」を意味する単語。

← 言葉が指し示す実体や概念は、存在する（した）必要もなければ、存在可能である必要もない。

【類似する学説】 ソシユールの「言葉の恣意性」（シニフィアンとシニフィエ）

シニフィアン…記号表現（意味するもの）……「動物」・「犬」・「木」などの字や「ドウブツ」・「イヌ」・「キ」などの音声

シニフィエ…記号内容（意味されるもの）……シニフィアンが

指しているもの

← 「動く全てのもの」が「動物」というシニフィアンに対応するシニフィエであるならば、自動車や地球、風に揺れたり車で運搬されたりしている最中の植物も「動物」となる。

← シニフィアンは「動物」であつてもよければ、「どうぶつ」・「○△□」などであつてもよい。

← 日本語の「木」は、英語の「tree（自然植生としての木）」や「wood（木材）」を含む。各自然言語は、互いに異質な方法で世界を分節する。

← 「動物」と「animal」、「犬」と「dog」も同様。

（互いに「同じものをそれぞれの言語のシニフィアンで呼ぼう」と示し合わせたように見えるのみで、実際は世界各地で別々に同時多発的に世界を分節する中で「似通ったカテゴリ」が発見・了解されているのみである。）

シーニュ・・・一対のシニフィエとシニフィアンの恣意的関係

言葉は、世界を分節し、言葉を生み出したはずの我々自身に対し、分節された世界を同時に認知させている。言葉どうしの違いは、人間の外界に存在するはずの実体に根拠を持たない。

【例】

●虹の色の数は異言語どうしで必ずしも一致しない。

●「蝶（チョウ）」と「蛾（ガ）」は、生物学的には違いはなく、文化的・宗教的な違いであり、特に日本においては、虫の外見についての快・不快の情、出現時期や出現場所、方言の違いなどによって使い分けられているのみである。

●「右人（みぎびと）」・「左人（ひだりびと）」・・・

妄想性障害者の造語。「右を向いている人」・「左を向いている人」の総称。たとえ家族であつても、「右人」や「左人」である瞬間は、この患者には、それが「父」や「母」と同一人物であるとは認知されない一方で、街中の「右人」・「左人」の顔が全て同じに見え、家族と他人とを区別できない（相貌失認）。

← 「家族」や「友人」とは、言葉が自己に向かって跳ね返した「有機体・生命体の一つの分節法」の恣意的な説明であり、文脈である。すなわち、「家族」や「友人」といった親族語・人間を表す語は「ヒト」自体を指していない。ところが、「自己」自身でも毛頭ない。「家族」や「友人」とは、自己でも他のヒトでもない「他者」である。

← ただし、ほとんどの人間は、「家族」や「友人」が具体的・個別の実体としての肉体を持ったヒトを指していると信じて生きているか、またはそう信じなければ耐えがたい。

← 「他者」への「愛憎」とは、全てが「自己自身」の「世界の了解の方法」の問題である。

← ある特定の文法言語を獲得したことで失った「正当で自由な妄想」（例：上記の「右人」・「左人」）への憧憬を常に持ちながら文

法言語の内で自己自身を懸命に生き続けることが、我々人間のとるべき態度である。

【類似する学説】 言語的相対論（サピア・ウオーフの仮説）

エドワード・サピア…「言語は思考を制約する」、「言語は思考の特性を形成する」

ベンジャミン・ウオーフ…「言語は認識に影響を与える思考の習性を我々に提供する」

← ソシユールは、シニフィアンとシニフィエの恣意的関係のみを述べ、恣意的関係により構築された言語体系が思考の特性を生み出すことまでは述べていない。

【類似する学説】 フランツ・ボアズやクロード・レヴィ・ストロースの「文化相対主義」

「ある文化と社会の進化度は、他の文化と社会の尺度のみによって判断することはできない。」

「文化と社会の進化や、文化間・社会間の優劣というものは存在しない。」

【類似する学説】 ベルクソンの他者論、純粹持続、エラン・ヴィ

タール（生の躍動）

【類似する学説】 メルロー・ポンティの知覚論、現象学

ある言葉×の意味は、「×ではないもの」との差異によって、必ず差別的・排他的に、ネガティブに、かつ無意識に定義される。言葉の定義は、多数の自己の欲望の暴力的妥協の絶え間なき反復である。

【例】

● 「大学を卒業し、就職面接に合格して、晴れて社会人となった」と言うとき・・・子供や学生は社会の外側にいる

「女性の社会進出」と言うとき・・・女性の多くは社会の外側にいる

「暴力団などの反社会勢力」と言うとき・・・特定団体の人間は社会の外側にいる

「この社会では色々な犯罪が起きている」と言うとき・・・全ての人間が社会の内側にいる

← 複数の「社会」の同時運用（多数の社会構成員の自己の欲望の恣意的で暴力的な妥協点）

← これらの全てを、ほとんどの人（日本人）は即座に理解し分けることが可能であり、コミュニケーションも成立し、かつ言葉の多重規範性によってパニックをおこすなど心身に異常をきたすこともない。

← 「僕は社会人であって社会人ではないなら、いったいどうすればいいんだ。」

（発達障害男性の発言。大多数の定形発達者の言語の暴力的恣意性に対する忠実で正確な解釈は、近代の言語コミュニケーションの妨げとなる。すなわち、円滑な言語活動・コミュニケーションのためには、自己の暴力的恣意性が無意識的に実行されること、自己自身によって無視されることが要求される。）

● 「犬」は「犬ではないもの」の積み重ねによって定義されるが、それは「犬であってほしいもの」と「犬であってほしくないもの」とを分ける多数の自己の欲望の妥協点である。

【類似するが不足を感じる学説】 ソシユールの「差異の体系」

「犬」は「犬ではないもの」の積み重ねによって定義され認知される。言葉の意味は、差異のモザイクにより生じる。

← 言葉の意味付けの恣意性はその言語共同体の構成員の多数の自己の欲望によって極めて暴力的に運用され妥協されていることや、そのことが同じ言語共同体内に軋轢を生む可能性があるといったことに、ソシユールは関心がなかった。

（ソシユールの関心は、あくまでも「シニフィアン・シニフィエ」、以下に述べる「連辞・連合関係」や「ラング・パロール関係」などの、言語体系の二元的構造。方言、精神疾患者のパロール、乳幼児期のパロール、言語起源論などはほぼ無視。）

言葉の意味は言葉にはない。言葉によって、言葉自身の外部に（自

己と他者の中間のトポスに）定義される。

【例】

● 「お前、馬鹿だな。」（友人に対して、笑いながら発言）

「わっはっは。自分でもそう思うよ。」（友人）

← 文意：「お前、おつちよこちよいだな」

「お前、馬鹿だな。」（上司が部下に対して、けなしながら）

「申し訳ございません。」（部下）

← 文意：「お前、出来が悪いな」

「お前、馬鹿だな。」（いじめっ子）

「ううん、違うよ。僕は人間だよ。」（発達障害児）

← この発達障害児は、上記の二例のうちのどちらの文意・口調で語りかけられても、このような受け答えをする。この発達障害児は、これ以前に「バカはウマ（馬）・シカ（鹿）」と書くんだよ」と親（または他の大人）から教えられており、かつこの言葉が「知能のはたらきが鈍い人の形容」であることまでは理解できず、ウマとシカそのものであると理解した。

「馬鹿」の由来・・・僧侶の隠語である「莫迦（バカ）」の当て字。ウマとシカ程度の知能。元来の「莫迦」も「知能のはたらきが鈍いこと。また、そのような人」を指し、同義。

← この発達障害児は「馬鹿」という言葉で傷つくことがない。  
（「馬鹿」という言葉でこの発達障害児の喜怒哀楽を揺さぶることはできない。）

← 人を傷つける（喜ばせる）のは言葉ではない。（自己を傷つけ、喜ばせるのは、自己自身が生み出した言葉の解釈である。）

← 前者の二例のコミュニケーションが成立するためには、「馬鹿」がそれ自体として語意を持つ記号ではなく、前後の連辞的文脈によって語意とその機能が決定され、或る特定の共時態としての「特定の間関係」を生起させるための契機（感情誘発のトリガー）にとどまらなければならない。

← 最後の一例については、以下に述べる連辞と連合とが未分化である自己の保持者が存在することを示している。

← しかし、言葉がなければ、あらゆる喜怒哀楽は未分化・未分節のまま、世界につかみどころなく遍在するのみである。

【類似するが不足を感じる学説】 ソシュールの「言語非実質論」における「連辞・連合関係」

「ある語が他の語と接触する様式は二つある。」

連辞・・・シニフィアンとシニフィエが直喩的關係である語や文の連なり。統合関係

連合・・・シニフィアンとシニフィエが隱喩的關係である語や文の連なり。範列関係

← 「キが立っている。」は、「ここは公園だ。キが立っている。」といった前後の文脈の参照によって初めて「気が立っている」ではなく「木が立っている」という文意に解される。すなわち、当該文と前後の文・文脈の全てがシニフィアン、「木が立っている」がシニフィエであり、「木」はその他の語と統合関係にある。（連辞）

← 「この公園に何本も植えられているキ」の「キ」は、「木」であることが疑いようがない。すなわち、「この公園に何本も植えられている」がシニフィアンであり、「木」がシニフィエである。また、この「木」は、「花」などに入れ替えることができる。すなわち、「木」は「花」と範列関係にある。（連合）

← 岩崎式言語体系の考え方・・・  
「ただし、ソシュールは連辞・連合の二元論にこだわったため、このままでは印欧語の定形発達者のパロールにしか適用できず、現在の発達障害者・学習障害者などの文法ミスを説明できない。」

言語の構造とは、文法・統語法（シンタックス）そのものことである。ある言語のシンタックスが記述できない差異の体系は認知することができない（胎児・乳児・幼児期にしか認知していない未分節領域がある）。

#### 【例】

●ある会社の重役の発言：「女性のバラエティに富んだセンスがアク

タイプに、クリエイティブに社会にコミットできるストラテジをビルドするための我が社のコンセンサス、コンプライアンスをやつていくプランというわけです。」

← 多くの単語が英単語であるが、やはりこれは日本語文である。  
● 「私は、です、学生、であるところの、先日、ばかり、した、帰国。」

← 全ての単語が日本語であるが、統語法的には欧州語文である。  
● 日本の大学の学部・学科名：「カルチュラルスタディーズコース」・「クリエイティブライティングコース」・「エンターテインメントビジネスコース」など

← 多くが英単語の日本語解釈による造語や和製英語であり、そのままでは英語圏で通用しないが、その原因は統語法なし語の形態にあり、「カルチュラル」や「クリエイティブ」といった単語にはない。

● 「空をうつくらせない」・「ボクはママをさびしらせない」・「幼児の言葉」・「(何かが)空を美しくさせない」・「ボクはママを寂しくさせない」の意味に近いと考えられるが、「うつくらす」・「さびしらす」の意味内容を、日本語を含む既存の自然言語は正確に記述できない。

【類似する学説】 言語的相対論(サピア・ウオーフの仮説)、ジャン・ピアジェの「思考発達段階説」

言語的相対論については先述。

【類似する学説】 ソシユールの「ラング」・「パロール」・「ランガーージュ」

ラング・・・ある言語共同体における社会的規範体系としての言語の性質(標準日本語・東京方言の文法や、「この品詞の次にはこの品詞は続かない」という暗黙の了解の体系など)

パロール・・・個人の言語行為。ラングの個人における実践(特定個人のみ)の文法・語彙など。広義には、地方方言の文法・語彙などを含む。

ランガーージュ・・・ラングに基づいて行われる言語活動と、それによる世界の分節化能力

【疑義を覚える学説】 チョムスキーの「言語生得説」・「生成文法」

チョムスキー：「のちにいかなる個別の自然言語にも遷移しうるだけの十分な豊かさを持った、語族・語派の違いによらない、乳幼児に生得的な初期状態であるUG(普遍文法)は、合理的に特定可能である。」

← 岩崎式言語体系の考え方・・・

「すでに個別の自然言語の一派である印欧語の統語規則によって形而上学的言語学の系譜上に形成された(チョムスキーの)自己が思案し形式化しうるUGは、その自己を規定する印欧語の変遷史にしか適用できない。すなわち、言語学的な思考・思惟とはすでに近代印欧語的行為である。例えば、我々がアメリカ原住民の思考過

程を知るためには、良きにつけ悪しきにつけ、印欧比較言語学への批判精神や自己の擬似喪失体験（言語障害や精神疾患）を経なければならぬ。」

【対立する学説】 イェスペルセンの「英語孤立語化説」

イェスペルセン…「英語は、活用を失ったことでいずれ中国語のような孤立語となる。」

← 岩崎式言語体系の考え方・・・

「英語は今後、孤立語化することは考えられない。活用を失って見かけ上は孤立語化した英語は、統語規則の自由度がより奪われた超理想的屈折語である。その証拠に、自動詞と他動詞の区別は、中国語ではとりわけ複合動詞において消失する場合が多々見られるが、英語ではほとんど見られない。」

一度習得した母語（言語共同体として用いるラング）は、個人の言語行為のうち、文法（統語法）を厳しく束縛していながら、それ以外の側面については放任する。シンタクスの獲得過程は、個人の思考の発達過程である。

【例】

●統合失調症者の文章…「心から記憶の近くを愛している紫色のゆくえが、私の右向きの悲しみをひどく未来に締め付ける」

●解離性同一性障害者の文章…「私の私が私の中の友達に約束する」  
●社交不安障害者の文章…「そんなことはない考えが緊張の赤面をくぐる恥ずかしさ」

← いずれも文法・統語法・連辞の上では非の打ち所のない日本語文。連合関係が定型のラングとはかけ離れているだけである。

← この統合失調症者は、「自己」と「他人」との区別があまりつかず、この区別をつける訓練をおこなっている。すなわち、ラングの文法の束縛性は、自己の存在を必要としないまま、本人（の脳）の中で強く保たれる。一度確立したラングは、人間の自己を離れて独立独歩し、それ自体が一つの「意志」として人間の仮想の自己をさえ束縛する。

← この解離性同一性障害者の中には、複数の「自己」が存在する。すなわち、ラングの文法の束縛性は、自己の複数化に合わせてコピーされ、複数の自己間で共有される。ラングに追いかけて束縛されない自己は存在しない。

【類似する学説】 レイ・ジャッケンドフの概念意味論、ジャン・ピアジェの「思考発達段階説」、井筒俊彦の「言語アラヤ識」、龍樹（ナーガールジュナ）の中観思想、唯識論

【多少疑義を覚える学説】 チョムスキーの「言語生得説」・「生成文法」

【対立する学説】 ソシュール、印欧比較言語学、デカルトの動物機械論、優生学、社会進化論、弁証法的唯物論、目的論的進化論、行動主義心理学、英語帝国主義

ソシュール…「言語の起源などというものは存在しない」、「言語の発生に根拠はない」

← 言語の起源や獲得過程（自然言語の発生源や乳幼児の母語獲得過程など）の存在を信じることはなく、その探究に無関心。あくまでも「根拠なくすでに在るラングこそが言語である」として、言語学の対称をほぼラングに限った。

言葉のアイデアは存在しない。

【例】

● 「善人」・「美人」…

人間の認知不可能な理想的・超越的異世界（神のみが創造・統制・参照できるアイデア）に何らかの形で善人・美人（または、神がそれらの定義を記述した仮想辞書）が存在して、それがために「善人」・「美人」という言葉が生まれたのではない。

● 同様に、先述の「コップ」のように、理想的な機能・形状・大きさなどを持った実体・個物のアイデアも存在しない。

● 「英語では動物を animal と言う。」という言明は、シニフィエの根拠にアイデアを前提とし、アイデアを媒介した言明であることから、

誤りである。

【類似する学説】 ソシュールやヤコブソン以来の構造主義言語学、実存哲学、実存主義、ニーチェ哲学、「生の哲学」、反哲学、文化心理学、直観主義、多値論理、フアジイ論理、ソクラテス以前のギリシア自然哲学

【対立する学説】 プラトニズム、アリストテレスの唯名論、ヘーゲル哲学、形而上学至上主義、侮蔑的ペイガニズム、印欧比較言語学至上主義、科学的事実論

プラトン…「アイデアが存在し、それが個物や個物の集合、概念に取り付いているがために、名前（名詞など）を付けることができる」、「人間はアイデアを認識できない」（実在論的）

アリストテレス…「個物や個物の集合、概念が存在し、それに名前（名詞など）が付いている」（唯名論的）

← 「我々が何かに名前を付けたら何かを考えたりすることができるのは、個物か概念かを問わず、それが元よりどこかに存在しているからだ」と考えた。

← 「人間が認知し得ない理想的・絶対的世界の実在」という考え方は、「アイデア」や「純粹形相」と呼ばれ、のちに一神教（とりわけキリスト教）と親和して「God」と呼ばれる。

文化・宗教・習俗の発祥や精神疾患の出現の仕方は、ラングとしての母国語の統語法がランガージュ（言語活動）によって我々の自己自身に跳ね返した文脈（世界の分節の方法）の制約を受ける。

【例】

●文化依存症候群（文化結合症候群）の存在…日本の対人恐怖症、朝鮮半島の火病、マレーシアのアモック、東南アジアや中東のラタ、東洋の腎虚など

← これらは、医学的・生物学的現象としての症状に対する呼称ではなく、各自然言語（ラング）の語やシンタックスで分節化・記述・言明された世界がパロールを操る自己に向かって跳ね返った結果として起きた言語文化的症状である。（言語文化としての精神疾患）

●日本の鯨食文化に対する批判と捕鯨活動に対する動物愛護団体からの暴力的妨害

← 日本語の文脈における日本人の脳には、鯨が特別に優先的に保護すべき哺乳類とは認識されていない。（農耕文化・海洋文化と家畜・放牧文化との違いは、それぞれの言語文化と一体である。）

← 鯨食のみならず、馬食・牛食・羊食などについても同様のことが言える。

●大逆罪・尊属殺人罪の旧規定、定型発達者と発達障害者・知的障害者との区別など…

← 天皇・君主・政府要人・親族・定型発達者の生命（身体的作用）・人権・人格（神格）などは、それら自体が尊ばれるべきものと

して生物学的イデア界によって定められ、言語に先立ってその崇高さが存在し、我々の眼前に認知されているのか（一神教的な神にとって生得的に最も喜ばしく優秀な有機体の分子構造は存在するか）、それとも、我々の言語行為（ラング、法の条文、共同体の方言、口承など）が世界を分節化して生み出した文化・習俗・宗教観の積み重ねの賜物こそが社会制度であるのか。後者であると言わざるを得ない。（後者の徹底的肯定が「他者」への真の崇敬の念である。）

【類似の学説】

クロード・レヴィーストロース、ラドクリフ・ブラウン、文化人類学、構造機能主義、構造主義社会学、文化心理学、文化精神医学、アニミズム、トーテミズム、最新のDSM（アメリカ精神医学会による）

DSM-IV-TR、DSM-5の言語的相対論的態度…「精神疾患は定義できない」、「例えば、統合失調症者が存在するのではない。統合失調症の診断基準に該当する者が存在するのみである」

【対立する学説】 印欧比較言語学、操作主義的精神病理学、バージョン III～IV までの DSM

【参考文献】

"Language, Thought, and Reality", 2ND : Selected Writings of Benjamin Lee Whorf, Carroll, John B. (EDT), Levinson, Stephen C. (EDT), MIT PR 2012

- 『一般言語学講義』 フェルディナン・ド・ソシュール、小林英夫訳、岩波書店、一九七二
- 『ソシュールの思想』 丸山圭三郎、岩波書店、一九八一
- 『チョムスキー理論辞典』 原口庄輔・中村捷 編集、研究社出版、一九九二
- 『構造主義』 ジャン・ピアジェ、滝沢武久・佐々木明訳、白水社〈文庫クセジュ〉、一九七〇
- 『未開社会における構造と機能』 ラドクリフブラウン、青柳まちこ訳、蒲生正男解説、新泉社、二〇〇二
- 『反哲学入門』 木田元、新潮社、二〇〇七
- 『言語理論と言語論—こどばに埋め込まれているもの』 児玉徳美、くろしお出版、一九九八
- 『言語学への招待』 中島平三・外池滋生、大修館書店、一九九四
- 『存在と時間』 ハイデガー、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、一九九四
- International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems 10th Revision (ICD-10) Version for 2010 (Online Version)". Apps.who.int. Retrieved on 2013-04-16.
- WHO (2010) ICD-10: Clinical descriptions and diagnostic guidelines: Disorders of adult personality and behavior American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed., text revision). Washington, DC: American Psychiatric Publishing.
- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (5th ed.). Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.
- "Intellectual developmental disorders: towards a new name, definition and framework for "mental retardation/intellectual disability" in ICD-11". World Psychiatry 3 (10): 175-180. October 2011.
- 『ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン（新訂版）』 監訳：融道男／中根允文／小見山実／岡崎祐士／大久保善朗、医学書院、二〇〇五年十一月
- 『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引・新訂版』 訳：高橋二郎／大野裕／染矢俊幸、医学書院、二〇〇三年八月
- 精神科病院入院患者の状況 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター (NCNP)
- 精神疾患：メルクマニユアル18版 日本語版
- 医学用語集めぐりぐり
- 『EBM 精神疾患の治療（2006 - 2007）』 上島国利、三村將、中込和幸、平島奈津子、中外医学社、二〇〇六年
- 現代日本語に関する実験
- 二〇〇五年九月五日 起筆

二〇一四年九月十八日 公開

二〇一七年三月十三日 最終更新

これらは私が考案・主催している実験ですが、私自身は普段仕事で会議などがあり、標準現代日本語を話す必要があるため、実験にあまり参加することができません。現在のところ、ほとんどの場合、新人間学研究会や岩崎式日本語研究会のメンバー様（特に無職の方々）が実践して下さっています。

【注意】 これらの実験は、言語学的観点から考案者・参加者自身の意志によって行われているものです。母語の獲得過程の途上にいる子供や精神疾患者・知的障害者の方々に対する参加の強制などは絶対に行わないで下さい。

その他、以下の関連する注意事項も合わせてご覧下さい。

- 岩崎式日本語に触れていただく際の注意点
- 岩崎式日本語の使用者の方々向けの注記
- 精神病理学・精神疾患研究内の各注意事項
- ご訪問者の方々向けのご留意事項

【ルール（統語論・形態論に関する実験）】  
一日間、用言の終止形を用いて発話してはならない。（日常生活の中で自然に検証するため、無言の時間もカウントする。）

結果

全員が一分以内く三時間で脱落。

・ ・ ・ 多くの場合、誤って「もう夏が終わるって気がする」などと終止形を用いたことに気づき、脱落。残った人も、ルールに留意しながら発話すれば技術的に終止形を避けることは可能であったが、心理的に極めて大きな負担・重圧がかかり、途中で挫折。

【ルール（統語論・形態論に関する実験）】  
一日間、用言の命令形を用いて発話してはならない。（日常生活の中で自然に検証するため、無言の時間もカウントする。）

結果

全員が一分以内く七時間で脱落。

・ ・ ・ 多くの場合、誤って「これを頑張れってこと？」などと命令形を用いたことに気づき、脱落。残った人も、ルールに留意しながら発話すれば技術的に命令形を避けることは可能であったが、心理的に極めて大きな負担・重圧がかかり、途中で挫折。

・ ・ ・ 直前の実験と合わせて分かることは、我々は命令形よりは終止形を多く用いて生活しているが、命令形でさえ「使わないように留意する」ことは極めて苦痛であり、このルールの元での生活・コミュニケーションは不可能であるということである。

【ルール（文字体系・社会学・文化的アイデンティティに関する実験）】

一日間、一般にカタカナで書く単語を用いて発話してはならない。（「やかん」などの国語化した外来語は使用可。日常生活の中で自然に検証するため、無言の時間もカウントする。）

結果

全員が一分以内二十時間で脱落。

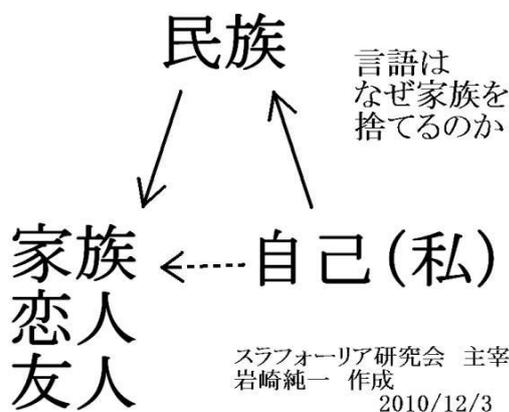
・・・これは、テレビのバラエティ番組などでも遊びとして行われているようである。

・・・結果として、個人差が大きく出た。日常でいわゆるカタカナ語や流行語（英語などの外国語、外来語、「スマホ」などの和製外国語、「ケータイ」などのカタカナ書きした国語など）を使い慣れている人ほど、このルールを守り切れなかった。

言語はなぜ家族を捨てるのか

二〇一〇年十二月三日 起筆

二〇一〇年十二月五日 擱筆、公開



特に具体的な活動が決まっているわけではないけれども、僕の考案言語スラフオーリア（現在の岩崎式日本語）について仰々しく「スラフオーリア研究会（現在の岩崎式日本語研究会）」を設けた。「自分（日本人）はなぜ、家族や友人と会話するにも、いったんは家族や友人を捨てて迂回し、日本民族の日本語という言語へと大回りしなければならぬのか」この悩みは、僕が中学二年生の頃から持っていた悩みのうちのひとつだった。

世の中には、いわゆる「家族ルール」というものがある。「ウチでは皆、トイレの扉を開けっぱなしで用を足す」、「我が家では車には

土足で乗らない」、「家族それぞれがマイ風呂桶を持っている」など、色々個性的なものを耳にする。

しかし、もし本当に「家族 (family)」が社会と文化の最小単位であるなら、「日本語」ではなく「家族語」が存在してもよかつたはずである。

あるA家の中では、「扉を開けっぱなしで用を足す」を意味する動詞「ばなしばさらす」があつてもよいはずだし、B家には「車には土足で乗らない」を意味する否定動詞「どさらばさらない」があつてもよいはずである。あるいは、「ウチでは動詞の活用をしない」などという独自の文法が成立しそうなものである。

だが、そうはならない。わざわざ家族の「外部」の言語「日本語」を用いて「扉を開けっぱなしで〜」などとややこしく言う。

我々は、身近な家族と話すにも、一旦は「家族」なる概念を横に置いて、むしろ「日本民族」なる概念を確定的に実在するものと仮定し、その民族が用いる「日本語」へと大回りして再び家族を認識している。なぜか例外なく、そうである。

「家族と心を通じる」ということの真相は「家族の母語が認識できる」ということである。もし本当に「心が完全に通じ合っている」と断言できる理想的な家族がいるなら、そこに「日本語」は必要ないことになる。

つまり、我々日本人が「家族」と言うとき、それは結局、「日本語で互いに認識し合う家族像の幻影」という意味のことであるとさえ言える。

「日本」「日本人」「日本民族」「日本文化」といった概念と、純粹な「家族」という概念とは、本来は相容れない。

もちろん、ここで言う「家族」とは英語的「family」、「民族」とは英語的「race」、「言語」とは英語的「language」のことだ。戦前・戦中日本のように天皇を「現人神」と見なしたり、太古日本のようにムラの長を「父」と見なしたりし、日本民族それ自体が「共同体としての家族」であるという見方をすれば、日本ほど「言語」と「家族」とが高精度でほぼ一致している国は無い。

或る言語が共有される物理的・精神的領域というものは、必ず、一つの例外もなく、「家族」や「恋人」や「友人」といった最小のゲインシャフト（※注1）を捨て、「民族 (race)」という中途半端な共同体を選択して、なおかつそこにとどまろうとする。逆に、どんなに一つの言語（英語）が世界に普及しようが、全人類が地球規模でそれを母語とするところまではいかないのである。「言語」は必ず、自然の摂理として、「民族」を選択するのである。

もちろん、日本においては、まだ江戸時代にもアイヌ・蝦夷（エミシ）・隼人（ハヤト）・熊襲（クマソ）などの少数民族が本州の至るところにいて、それぞれに言語があつた。だから、今僕が言っている「日本語」とは、「天皇」の支配の及ぶ領域の母語としての「日本語」である。もし天皇の存在がなかったなら、日本語の規模と分布は全く違っていたわけである。

つまり、僕の冒頭の問いは、「なぜ僕は、家族や友人としゃべるにも、一度は天皇と同じ言語と世界認識を志向するのか」という問い

と同じであることになる。「なぜ自分は、自分の父親と話すにも、いったんは天皇を中心とする日本語の認識世界へと迂回してから父親を認識するのか」という問いのことである。

日本人、特に男性ならば、この事実（自分の父親と天皇とが同じ言葉をもととして生きる事実）と人生で一度は真剣に向き合うべきだと思う。このことを喜ぶか苦しむかは別にして。そして、やはり日本人は、英語よりも日本語の良さに立ち返ってくるのがよいとも思う。

この事実を言語学的に破棄して、自分の母語である日本語を否定し、自己意識の外部に無言語的に実在するものとしての「父親」とか「大自然」とか「好きな女性」を完全に認識するということは、日本人には不可能なのだと言える。あるいは、それができないことが日本人の特質であるとも言えると思う。

「日本国」と「日本民族の居住領域」とがだいたい一致しているがために、我々日本人自身には分かりにくいのが、「言語」が「国家」「国境」ではなく「民族」なる境界をおのずから選択していることは、イスラエル人やクルド人や朝鮮人を見れば簡単に分かることだ。国を持たずとも、民族がいるところには生き生きとした言語があるのだ。

ところが、その言語を操る我々人間にしてみれば、「家族」や「恋人」や「友人」といった小規模の共同体のほうが定義しやすく、かつ安心感の基本単位なのであって、「民族」なる概念のほうが混血その他の理由によって不安定なもののはずである。

しかし、そういった「家族」についての定義や安心感のほうが、どうやら極めて近代的な思考様式であって、人間の脳は、本来は「民族」なる概念のほうに安住するようにできているらしい。ということは、「民族」全体をいわばゲマインシャフト的な「家族」と考えていた戦前の日本は、あえて軍国主義をやったというよりは、その思考様式が極めて生物学的・生態学的に見て自然であったがために戦争を避けられなかったとも考えられる。

しかし、特に現代社会では、「人間」と「言語」とは、分離した別個の主体概念であり、「言語」それ自体が「人間」の意志と同等の仮想意志を持つてふるまっている。だが、この「人間」と「言語」の分離独立に気づいている日本人は、本当に少ないと思う。

僕の勝手な意見であるが、「日本人」とは「日本語を第一言語・母語・人生の基盤語として話す人間」のことである。逆に言えば、「日本の小学生に強制的に英語を学ばせることを良しとするような日本人」は「日本人ではない」と僕は信ずる。

そして今や、たとえ「民族」よりは近代的な概念であるけれども安住できる場所の筆頭であるはずの「家族」という概念さえ、虐待問題などで崩れかかっている。

※注1…ゲマインシャフト（共同体）・・・

血縁・地縁・恋愛・友情などによって自然に結び付いた伝統的共

同体。家族・親族・恋人・友人・町内会など。多くの場合、或る一つの言語を母語として共有し、なおかつその言語の行われる範囲よりも小規模である。利害関係をもとに人為的に形成された会社（営利社団法人）・地方自治体・近代国家・超国家型同盟（国連・NATOなど）といったゲゼルシャフト（利益社会）に対する概念。ドイツの社会学者テーンニースらが提唱。

共和制・大統領制国家は間違いなくゲゼルシャフトであるが、立憲君主制国家の一部はゲマインシャフトである。日本は、事実上の元首として天皇を戴いており、特に戦前では巨大なゲマインシャフトを形成していたとも言える。日本語は、憲法にも国語・公用語として記載されていないからこそ、現在でもゲマインシャフト的な言語と言える。

### 新常用漢字

二〇一〇年十二月十日 起筆、擱筆、公開

（二〇一八年七月十五日追記…現在、リンク先の岩崎の旧サイトの内容は『全集』に掲載。

今年の六月に文化審議会国語分科会から文部科学大臣に答申され、先月三十日に告示された新常用漢字表。僕が以下に載せている2965字は、日本工業規格の第一水準漢字で、常用漢字・新常用漢字

を含む別規格だが、いずれにせよ僕は、今回の新常用漢字も全て其感覚色で記憶している。

[http://iwasakijunichi.net/ronbun\\_jippan/kanji1-1.pdf](http://iwasakijunichi.net/ronbun_jippan/kanji1-1.pdf)

[http://iwasakijunichi.net/ronbun\\_jippan/kanji1-2.pdf](http://iwasakijunichi.net/ronbun_jippan/kanji1-2.pdf)

今回新たに追加された196字は、「柿」「亀」「誰」「脇」など、すでに多くの国民が用いている字で、それほど難解な字はない。「書けるかどうかは分からないが、ほとんどが読める」という国民が圧倒的多数と思われる。

（常用漢字に追加された196字）

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/joyo2010/list.html>

削除されたのは「勺」「錘」「銑」「脹」「匄」の5字。「勺」と「匄」は度量衡の単位。「錘」は、「紡錘」くらいしか使わなくなった。「銑」は、もはや日本史マニア以外は知らなくても困らないような漢字（陸軍大将・第三十三代内閣総理大臣 林銑十郎）。「膨脹」も、今は「膨張」と書くのが普通。一方、「通信（ていしん）」の「通」は残ることになった。

たった一つ、読みが変更された漢字があつて、それは「側」。「かわ」が「がわ」になった。「かわ」と読むのは、「右側」「上側」など促音「っ」を伴うときぐらいだ。例えば、「面」は、単独では「づ

ら「よりも「つら」と読むことが多いのに、「側」は単独でも「がわ」と読むようになった。明治・大正時代は「かわ」と読んでいた。今そのように読む人は、普段観察する限りでも、ほぼ全て九十歳以上の入である。

二〇〇八年に亡くなった国語学者の大野晋氏は、「日本語の起源はタミル語である！」と奇説を唱えながらも、廃れゆく「日本語の良さ」については鋭い洞察を持ち、「なぜ漢字が工業規格なんだ。文化規格にすべきだ」と言った。今後も、そのような優れた国語学者が出てこないものだろうか。

昔は、前近代的で突拍子もない新説・奇説を持った国語学者は多かったが、日本語を愛する心は今よりもずっと大きかった。

（文化庁 「常用漢字表の内閣告示等について」）

[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naitaku/kanji/](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naitaku/kanji/)

★訂正★

「漢字は工業規格ではなく、文化規格であるべきだ」と言ったのは、大野晋氏ではなく、情報工学者の坂村健氏でした。失礼しました。もしかすると、大野氏も言ったかもしれません。いずれにせよ、私たちの論は正論だと思います。